

平成30年度 奈良市立都跡こども園 研究実践概要

園長名 山中 理恵子
全園児数 158名

1. 研究主題 “もっとおもしろく”で広がる遊びの世界
～子どもが夢中になって遊び込む環境構成や援助の在り方～

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

1年目は、子どもたちが“もっとおもしろく”と夢中になって遊ぶ姿を分析し、遊びを創りだしていくプロセスを図式化した。2年目は、援助によって子どもがどう行動したかを子どもの姿に沿って援助と保育者の意図を分析した。そこで今年度は、援助の工夫も引き続き探りながら環境構成について見直し、子どもが夢中になって遊ぶためにはどのような環境構成の工夫や援助の在り方が必要なのかを探ることにした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・主体的にひと・もの・ことに関わり、“おもしろい”と感じて試行錯誤するための環境構成や援助について探り、自ら遊びを創る子どもを育てる。

②研究の重点

・3・4・5歳児の発達に応じた経験をするために必要な環境を見直す。
・研究主題に沿った各期の事例を持ち寄り、環境構成と援助が子どもたちにどう影響するのかを年齢ごとに分析する。

③活動の方法

・6クラス5期の実践事例から、各年齢の育ちに適した環境構成と援助について分析・考察を繰り返し行う。
・子どもがどのように環境と関わり、「おもしろい」と感じているのか、また、前日の子どもの姿から予測し、どのような環境を用意しておくことが必要かを探るようにした。その特徴が顕著に表れている実践事例を抜粋したものを以下に示す。

○ねらい 環境構成 ㊦ 援助

遊び込む姿に繋がる要因

前日の姿から予測した環境

3歳児 「夏なのに…雪!?’ 6月

○ 自分のしたい遊びを見つける。 ○ 泡の感触を全身で味わいながら遊ぶ。

泡立てたり、泡の感触を味わったりできるように石鹸、網、スポンジ、布をワゴンに分類し、一つ一つの用具が見えるようにしておく。水に石鹸の削り粉を入れた広くて浅いタライを、保育室から出た子どもたちが目のつきやすい場所に用意しておく。

タライに入っている石鹸水を手でかき混ぜて泡立てているA児。㊦保育者も一緒にかき混ぜる。大きなしゃぼんができ始めると「泡が増えてきた」と、さらにかき混ぜる。「ふわふわ」「もふもふしてきた」と泡の感触が変わってきたことを喜んでいた。裸足で側に来たB児に泡の感触を味わえるようにB児の足に保育者がそっと泡を乗せたことでと、何度も踏みしめて「気持ちいい」「ふわふわ～」と喜ぶ。それを見たA児も自分の足に泡を乗せ始めたので、

目につきやすい場所

大量の泡と存分に関わられる環境

保育者の存在

泡の感触の心地良さ

⑩「A 児もやってみる？」と声をかけて一緒に泡を乗せる。A 児は自分の足の周りを埋め尽くすようにタライの中の泡を地面に置き、「雪みたい」と呟く。⑪「本当だね！雪みたい」と共感する。タライの泡が少なくなるとかき混ぜて泡立てることを繰り返すうちに側にいた C 児と D 児も同じことをして遊ぶ。保育者も一緒にしながら「雪はどうですか」と問いかける。A 児と C 児は、地面の泡を踏みしめて「冷たい」と嬉しそうしそうにつぶやき、D 児「夏なのに…夏なのに…雪！？」と少し首を傾げながら笑顔で言った。⑫「本当だね。冷たいね」「夏だけど雪が降ってきたね」などと共感の言葉がけをしながら繰り返し一緒に遊んだ。

何度も繰り返して
できる



雪に見立て
る面白さ

《考察》

- ・目のつく場に環境を構成したことで、「やってみよう」という気持ちに繋がった。大きなタライを準備したことで、やってみようという人数が増えても一人一人が十分に泡と関わることができた。また、すぐに泡ができるように石鹼水を用意したことで、大きいしゃぼんができて、さらに「ふわふわ」「もふもふ」などと泡の感触が変わるなどのおもしろさを感じることができた。
- ・タライの中で泡立てることを楽しんでいたら、保育者がタライから泡を出して足に乗せたことがきっかけとなり、足や地面に泡を置いたことで手だけでなく、体で泡の感触を味わう体験となり、「雪みたい」と子どもなりの世界観で見た感性を引き出すことができた。保育者が一人一人の思いに寄り添い、共鳴して一緒に遊ぶことで、泡立てたり、地面に置いたりして手や足で泡の感触を楽しむことを繰り返し遊ぶ姿に繋がった。

4 歳児 「水がブワー！ってなるねん」 6 月

○水の性質のおもしろさや不思議さを感じながら、繰り返し遊ぶ。

水を運び、築山の高さを生かして太鼓橋の綱にトイを引っ掛け、水やボールを流して遊んでいると偶然にも太鼓橋の綱とトイとの隙間にボールが挟まり、そのボールを水で流そうと、バケツに汲んだ水を勢いよく流すと、ボールが止まったまま、水がボールに当たり、噴水のように水が跳ね上がった現象がおもしろくて、繰り返し遊んでいた。

偶然から
生まれた発見

前日の子どもの姿から、遊びの場に、たくさんのタライに水を溜め、すぐに使えるようにしておく。また、ワゴンにはボール、ジョイント、牛乳パック、ペットボトルなどいろいろな形、長さ、大きさ、太さの用具を置いて、したい遊びができるようにしておく。

子どもが自分で
使い方を考え
出せる環境

高低差をつけるために、近くにあったバケツを逆さに向けて置き、コースを繋げていく。すると、偶然にもトイから流れた水がバケツの裏の淵に当たり噴水のように水が跳ね上がった。⑬「うわ！！すごいね」と偶然起きたことを一緒に楽しむ。⑭「今のすごかったね」と声をかける。A 児「うわーすごい。もう一回」と繰り返し遊ぶ。側にいた B 児も「すごいな」と驚く。⑮「おもしろいことが起こるよ。一緒に見よう」とワクワク感が近くで遊んでいた子どもたちにも伝わるような声かけをする。A 児「先生、いくで！」と保育者に知らせるが、ふと「あっ、ちょっと待って。先生も一緒にやって」と誘いかける。⑯「先生も一緒に？いいの？やってみよう！」と一緒に遊ぶ。B、C、D 児も牛乳パックやバケツに水を溜め、築山を登る。⑰「うわ、友達がいっぱい来たよ。みんなでするとどうなるんだろうね」とワクワク感が伝わるように声をかける。A 児「まだ、待ってや。まだやで」⑱「待っているよ」「合図くださいね」と伝える。「よし、せーの」と A 児のかけ声で、みんなが一斉に流す。「わあー！！めっちゃすごい！！」と、おもしろさを抑えきれないほどの喜びで、盛り上がる。⑲「みんなで流したら、さっきより水がすごかったね」と一緒に喜ぶ。A 児「1 人より 3 人より 4 人の方が、水がブワー！ってなるねん」と話す。その後友達と一緒に繰り返し遊びを楽しんでいた。

子どもたちの
気持ちを
掻き立てる
偶然からの
おもしろさ

みんなです
るからおも
しろい



予想を超えた
現象

《考察》

- ・同じ場所に遊びのワゴンやタイヤに水を溜めて準備をしておいたことで、気持ちが持続し新たなコースを友達と考えながらつくり、試すきっかけになった。トイの先に高低差をつけるために置いたバケツだったが、バケツの底の淵に流れてきた水が当たって跳ね上がった偶然の出来事をおもしろがって遊ぶ姿が子どもたちの気持ちを掻き立て、周りの子どもたちも“やってみよう”という気持ちになった。最初は、一人で流していたが、友達と一緒にタイミングを合わせて水を流したことで、水の跳ね方が想像以上に高くなった。このことを通して友達と一緒にするおもしろさを感じた。また、水の量や勢いによって流すたびに跳ね方が変わる偶然の発見が“おもしろい”の要因となり“もっとやってみよう”という気持ちに繋がった。

5歳児 「どうしたら同じのつくれるのかな」 11月

○友達とイメージを共有しながら、気付いたことや考えたことを試す。

様々な形や大きさの木片を使い、木工遊びをして作品をつくった。作品を友達に見せると、建設中の園庭の木製遊具を真似たものがあった。遊具をつくられている方が寺田さんという名前から“寺田さんの弟子”と呼ばれ、嬉しそうにしていた。話す内に、「ほんとに登れそうやね」「ほんとに登れるくらい大きかったらいいのにね」「じゃあ、大きいをつくらうよ」「大きい木だったらつくれるんじゃない？」と盛り上がっていた。①「そんなのあったら楽しそうだね」と思い共感すると、「じゃあ、みんなで寺田さんごっこしよう!」と、遊びが始まった。



イメージしたものをつくれるように、木製遊具の隣に環境を用意し、いろいろな長さや大きさの木片、ボンド、紐を用意しておいた。早速集まり、木を合わせてひもで結んだり、ボンドを塗ったりして、友達と役割分担をしてくっつけようとするが、土台が固定されず、崩れてしまう。「どうしたら同じのつくれるのかな」と悩んでいる。①「寺田さんはどうしてるのかな?」と遊具の様子をじっくり見るきっかけができるように投げかけると、「見てみよう!」と遊具の様子を見に行く。すると、「同じ長さの木が2本立ってるよ」「下にも木があるね」などと、気付いたことを友達と伝え合う。子どもたちの発見をから遊びを広げられるようにその様子を見守る。本物の遊具のように登れるものをつくるため、木の構成の様子を探り、同じように長さや形が揃っている木片を探し始める。木が斜めに接着されていることにも気付き、「先生、木切れる?」と尋ね、①「切れるよ」と答えると、「じゃあ、斜めにくっつけられるね」と喜ぶ。「斜めじゃない下のとこくっつけよう」「同じ長さなら崩れないよね」と、土台と柱を真似てつくった。

本物を見ながらイメージしやすい場の設定

課題を解決して達成するおもしろさ

本物らしさにこだわった材料の選択

翌日、登園してくると、「昨日寺田さんに教えてもらったよ!」「園庭開放の時に聞きに行ってる」と嬉しそうに話す。「くっつけた時、木を挟んでおいたらよくくっつくようになるんだって」と、分かったことを友達や保育者に得意げに話す。それを聞いていた他児も「木を挟むの大きい洗濯ばさみでやってみよう!」と、期待が高まる。

木片の中に斜めに切った木をいれ、別の遊びで使っていた洗濯ばさみを子どもたちと一緒に用意した。「やってみよう」、と前日につくっていた土台と合わせ、ボンドを塗り、洗濯ばさみで固定し始めた。「あっ!くっついた」「寺田さんと一緒や!」と喜んでいる。「よし、もっとおもしろい登り屋根にしよう!」と友達とさらに相談し始めた。「ここに階段つくったら登れるんじゃない?」「こうしたらくっつくよね?」「ブランコもあったらおもしろそう」「いいね!」と、どんどんアイデアが浮かび、友達と考えを伝え合い、自分たちだけの遊具をつくることを楽しんでいた。

道具を工夫して使うことを発見したおもしろさ

本物みたいにつくりたい

よりおもしろくしたいという探求心

思いを実現させたい意欲

友達と考えを出し合い、協同して遊ぶ楽しさ

《考察》

- ・子どもの本物みたいにつくりたいという思いを読み取り、実物の近くでつくすることで刺激をもらったり、興味や関心が広がったりするのではないかと考え、環境構成をした。いろいろな大きさや長さの木片を遊具の隣に用意したことで、実際の遊具の構成の細かい部分を見に行ったり調べたりし、刺激を受けながらつくることができた。それを取り入れようと、気付いたことを話し合ったり、試したりしたことで、ただ真似るだけではなく、自分たちだけの遊具をつくるためにはどうしたらいいかを考える姿に繋がった。
- ・遊具の建て替えの時期と重なっていたため、遊具だけではなく、つくっている方にも親しみを感じ、遊びに取り入れ始めた。アドバイスをもらったり、聞いたことをすぐに試せるように洗濯ばさみや木片を用意したりしたことで、楽しみながら継続して遊ぶ姿に繋がった。

5. 研究の成果

- 3歳児は、保育者と一緒にとという思いが強いことから、子どもに寄り添い、受け止めることで安定して自分のしたい遊びを見つけることができる。まずは、保育者が側にいることが、大きな環境である。目に入ったものやことを見て、「おもしろそう」「やってみたい」と感覚や感情で能動態にもの・ひと・ことと関わり、心を揺さぶられる体験を大切にしながら、前日の姿から今日の子どもたちの姿を予想し、目につきやすい環境を構成することが大切であることが分かった。この年齢や時期に育つ五感を通じた感覚的・直接的体験を大切に、感触や不思議さや出会えるように、保育者と同年齢の友達と一緒に遊べる場を確保することで、3歳児ならではの発見や不思議に出会い、「おもしろい」「もう一回したい」と繰り返し遊ぶ姿に繋がることがわかった。
- 4歳児は、少しずつ「こうしたい」という目的をもちながら、遊ぶ姿がある。しかし、その目的は一人一人違うことも多く、子ども同士で思いを共有することは難しい。そこで、保育者が子どもたち一人一人のつぶやきや気づきを丁寧に拾い上げ、寄り添いながら、環境構成や援助をすることで“もっとおもしろく”と遊ぶようになる。偶然の発見から面白さを感じ、子ども同士が繋がっていく。毎日遊びの様子は変化していくが、保育者自身がその変化に柔軟に対応し、前日の子どもの姿から予測して遊びが途切れないように子どもの興味に沿ってどんな材料や用具が必要かを考えて準備する必要があることが分かった。
- 5歳児は、これまでの経験から「こんなことをしたい」と興味をもち、予測をして遊び始める。寺田さんという憧れの存在が大きな人的環境となり、本物らしさにこだわって「より本物らしくしたい」と目標をもって、遊び込む姿に繋がった。保育者は子どもの思いを受け止め、前日の姿から予測したり、興味に即したものを用意したり、選択できるように様々な用具や場を整えることが必要であるということが分かった。そうすることで、より明確な目標をもち、思い通りにならないことがあっても、諦めずに乗り越えようと試行錯誤し続ける子どもの姿に繋がるといえることが見えてきた。

以上のように、各年齢の発達の様子が異なることから、年齢に応じ環境構成の工夫の仕方を変えていく必要がある。そのためには、目の前の子どもの姿を読み取り、発達を理解し、子どもが主体的にもの・ひと・ことと関わり、環境を通して自ら遊びを創ることができるように、日々の保育を振り返り、明日の保育に繋げる環境構成の工夫や援助の在り方を常に見直していく必要があることが分かった。

6. 今後の課題

子どもの心の動きや、興味や関心を丁寧に見取り、何を体験させたいのか、付けたい力は何か、そのために必要な環境構成や援助はどのようなことか、さらに追及し、分析して、発達を理解しながら保育者の役割について考えていきたい。